

青森県立郷土館が所蔵する手描きの桜の花を集めた図譜『櫻花聚品』を紹介したい。この図譜は、174ページにわたり280余りの桜の花の図を集めたものである。桜の花それぞれの特徴をとらえ、種類毎に見事に描き分けられている。

つぼみから開花までの状態を、花卉の向きや角度を変えて立体的に描写し、細部の彩色にもこだわっている。白色に薄紅色を重ねたりして、色調に微妙な変化を加え、柔らかな花卉の様子が表示され、ページをめくるとに様々な表情の桜

の花に出来る。

桜の名所や大名屋敷内の桜も紹介され、まるで江戸時代の桜図鑑のようだ。当時から、これほどまでに様々な桜を見分けながら愛でる人々がいたのかと驚かされる。

誰が描いたのか分からないが、幕末の弘前に生まれた日本画家佐藤部(1852~1944年)が、なんかの形で関わっていたのではないかと考えられている。部は、画家としても優れ、その上、歴史や植物にも造詣が深かった。確かな描写力を持つ部が、鋭い観



櫻花聚品より=青森県立郷土館所蔵

察力と深い洞察力を発揮して描いた土器や石器、植物などのスケッチ図は、考古学や植物学においても高く評価されている。『櫻花聚品』は、部が大切にしていたものであった。あらためて細部の描写表現を見てみると、まず細い線で輪郭を描き、その上から彩色を施している。下絵を慎重に写し取り、美しい彩色を施す技術の高さをうか

### 津軽と江戸をつなぐ桜図鑑

太田原 慶子

(青森県立郷土館学芸主幹)

がわかる。画家としての優れた才能を持つ人物でなければ、これほどまでに完成度の高く、美しい図譜を作成することはできなかったろう。

実は、題名も内容も同じものが、岩崎久弥(1865~1955年)が設立した東京文京区本駒込の東洋文庫に所蔵されている。こちらも、制作者や制作時期が分かっていない。

両者は、描かれている桜の花の構図や順序が同じだが、表紙体裁や紙質が異なる。彩色の緻密さのような描き方にも差が見られるため、別々の人物が制作したものであり、両者

のもとになった桜の花の図を集めたものが別にあると思われる。

『櫻花聚品』の原本について、これまでに分かっていることを少し述べておきたい。国立公文書館(東京都千代田区)が所蔵する『古今要覧稿』は、豊富な挿図とともに様々な事象について解説する江戸時代後期の百科全書だ。ここに原図と思われる桜図が多数含まれていることがわかっている。

また、宮内庁書陵部が所蔵する『花譜』(文化年間に成立)も深く関わりがあるようだ。いずれも江戸時代の桜研究を伝えるもの、『櫻花聚品』はそこにつながる貴重な桜図鑑なのである。

東京と青森 639号  
東京青森県人会 2021年7月